

日韓国交正常化 60 年記念シンポジウム
「朝鮮通信使という『智恵』」開催によせて

内閣総理大臣

石破 茂



本年、日韓は国交正常化 60 周年という節目の年を迎えました。この間、様々な局面の中でも、今日の良好な日韓関係が築かれてきたのは、両国国民一人ひとりが互いを理解しながら、長い年月をかけて、しかし着実に交流の裾野を拡げてきた結果と感じています。

近世の朝鮮通信使は、17 世紀初めの地域の情勢の下での双方の判断や、様々な関係者の智恵により開始され、200 年以上の長きにわたり、行われていたものです。もちろん国際関係を律するルールは現在と異なるものでしたが、当時の日本にとって、国と国との関係を結んでいたのは、事実上、朝鮮との間に限られていました。

国と国との間で交わされる使節ですから、事前の外交交渉により、互いをどう呼ぶか、使節の規模をどうするか、どの地方に宿泊できるのか、費用負担をどうするかなど、互いの「国益」を背景に、細かな取決めが行われたとされています。民衆との自由な交流は許されていませんでした。

現在に至るまで、日韓は、隣国故の難しい懸案に向き合いつつ、同時に、特に昨今は厳しい戦略環境の中で共通利益を見だし、協力を進めようとしています。数世紀前にさかのぼる、朝鮮通信使がつむいだこの歴史に残る交流的一幕は、今を生きる私たちにも示唆を与えてくれるのではないのでしょうか。

多くの約束事で縛られていた当時の交流と、現在、両国の国民レベルで自然体で行われている自由な交流との違い、これを可能としてきた先人たちの努力、隣人をよく知りたいという人間が持つ自然な気持ちも、偲ばれます。

本シンポジウムでは、通信使外交の実態を、さまざまな切り口から歴史学的に分析して、その歴史的意義を明らかにし、近世の日本と朝鮮半島の人々が大きな対立を起こすことなく安定した関係が続けることができた先人たちの「智慧」を掘り起こすことを目的にしていると承知しています。この「智慧」を知ることは、日本の外交・文化の再発見にも繋がることでしょう。

通信使とゆかりのある静岡県清見寺（せいけんじ）には、「瓊瑤（けいよう）世界」と書かれた額が掲げられています。「瓊瑤世界」とは、二つの玉がお互いを照らし合えば、その光はさらに輝くという意味で、朝鮮通信使の方が揮毫（きごう）されたそうです。現代においても、両国が互いを照らし合うことで、日韓が共に一層輝きを増すことを願っています。

そのために、政府としても引き続き、両国国民同士による交流を後押ししてまいります。

本シンポジウム開催に御尽力いただいた関係者の皆様並びに本日御参加の皆様のみすますの御健勝と、日韓関係の更なる飛躍を祈念して、御挨拶とさせていただきます。